

## はじめに

2011年3月11日午後2時46分、私は岩手大学の研究室にいた。その数日前に、学生に本棚の整理をしてもらった。それがなかったら、本に埋もれていたと思う。余震が続き、恐怖を感じ、停電が続き、断水となったので、被災の影響を受けた。しかしながら、沿岸地域の人びとはそれどころではなかった。

このような大災害を身近なところで経験したことがなかったので、社会学者として何ができるのかと考えたが、自分がこれまでやってきたことが社会調査なので、調査者としてどのように関わっていけるかと考え続け、被災の諸局面に関わり続ける決意を固めた。「リスク」「生と死」ということが大きなテーマとなった。

2011年6月に、梶原昌五先生、飯坂正弘さんと沿岸の町を視察に行き、ゼミの学生たちとは、被災地の調査をゼミのメインのテーマにするのはどうかと討議した。そして、2011年7月に予備調査に着手し、被災地調査を開始した。最初に取り組んだのが①避難所代表者へのインタビュー、そしてその年度に、②大槌町仮設住宅入居者調査、久慈市調査、山田町仮設住宅調査を開始した。

その後も多様な調査や、防災まちづくりの検討や、生きた証プロジェクトなどにも取り組んだが、そうした調査の結果を体系的に整理して、調査結果のシリーズとして刊行するといった事業に着手することができなかった。そうして9年が経ってしまった。

数々の調査や被災地の各種プロジェクトに関わってくださった方は非常に多数にのぼり、数々の分析結果などが集まり、調査結果の原稿を受け取っていた。それにも関わらず、全体の成果の刊行が非常に遅れてしまった。関係するみなさまには多大な迷惑をおかけした。

そこでこのたび、東日本大震災調査結果シリーズとして「その1」を刊行することになった。関係者の皆様にお詫びするとともに、これを機に今後、「その2」「その3」と連続して出していき、私の研究室を起点に調査プロジェクトに関わってくださったみなさまと成果を共有するとともに、その結果をこれからの復興や防災の研究に役立てられるように、世に発信していきたい。

2020年3月31日

岩手大学教育学部・地域防災研究センター 麦倉哲